



帯広畜産大学

Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

平成23年度 センターにおける廃棄乳の動向 : 平成22年度と比較して

著者	塚本 孝志
雑誌名	畜産フィールド科学 (帯広畜産大学畜産フィールド科学センター年報)
巻	8
ページ	126-126
発行年	2012-07-23
URL	http://id.nii.ac.jp/1588/00003802/

1: 平成23年度 センターにおける廃棄乳の動向 ～平成22年度と比較して～

畜産フィールド科学センター 技術専門職員 塚本 孝志

メールアドレス tukamoto @obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

平成 22 年度では、特別管理牛舎内における廃棄乳について調査し、その動向が明らかになった。平成 23 年度では、継続調査と併せて搾乳舎での廃棄乳についても調査を行い、センター全体の廃棄乳の動向と、カトラナーの設置や真空ポンプの改修、新搾乳方法の導入や夜間放牧への転換などの取り組みが、廃棄乳の減少につながっているのかを平成 22 年度と比較し、検討してみた。

【方法】

調査期間を平成 22 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日とし、その期間中に特別管理牛舎や搾乳舎で飼養されていた牛を対象に、廃棄乳を乳房炎牛・蹄病牛・他疾病牛・乾乳牛・初乳牛に区分し、午前と午後時に頭数と乳量を調査し、月集計した。

【結果】

1. 廃棄乳合計で見ると、10,035kg減少（前年度比約11.8%減）させることができた。区分別で見ると、乳房炎牛では、11,018kg減少（前年度比約21.5%減）、蹄病牛では、2,018kg（前年度比約16.5%減）、他疾病牛では残念ながら、3,328kg増加（前年度比約44.8%増）となった。
2. 月区分別平均頭数を見ると、1.4頭減少（前年度比約17%減）させることができた。区分別で見ると、乳房炎牛では、1.3頭減少（前年度比約28.8%減）、蹄病牛では、0.3頭減少（前年度比約22.2%減）、他疾病牛では残念ながら、0.3頭増加（前年度比約38.9%増）となった。
3. 乾乳牛・初乳牛については、廃棄乳や月区分別平均頭数ともほぼ同じ状態であった。
4. 科学的根拠はないが、カトラナーの設置や真空ポンプの改修、新搾乳方法の導入や夜間放牧への転換などの取り組みが、廃棄乳の減少につながったと推測される。

【まとめ】

結果から、22年度より廃棄乳の減少につながってきているものの、依然としてその廃棄乳による経済損失は多い。特に、乳房炎牛・蹄病牛・他疾病牛で全体の80%以上を占めることから、今後ともセンター全体で疾病牛を発症させない飼育環境づくりをできそうなことから努めていこうと思う。